

生物生産学部 緑翠チーム

生物圏科学研究科学生 百田隆祥

フェニックス駅伝大会は、今年が5回目の出場でした。おかげでフェニックス駅伝は、私の中で完全に年末の風物詩となってしまっているのですが、私はこのすべてを緑翠チームという生物生産学部の学部内で結成されたチームで走りました。毎年、9月ごろになると、前の年に一緒に走った人から「今年はどうするのだ」「体調はどうだ」等々、尋ねられるのですが、その都度「さあどうしようかね」と答えつつも足の筋肉がビクビクと動いてしまうくらいですから、やはり好きなのでしょう。でも私の場合は、走るという行為以上にチームの友人と時間を共有するという事に魅せられたようです。

生物生産学部は周知のように'88年の春に福山から西条へ移転しました。私達はその移転を経験した学年ですから、福山のキャンパスも知っています。本部から遠く離れていることもあって、福山は独自の活動がたいへん盛んな所でした。緑翠チームに入ったのは、友人の勧めでしたが、初めて練習に参加したその日、足の太腿の筋肉がけいれんして立てなくなった事を憶えています。その時、私は学部の2年生でしたが、上は院生、教官まで、実験の合間を抜け出し、背中からオーラのごとく蒸気を発散させ、トラックを駆け抜けていく姿にただ圧倒されるのみでした。蒸気にむせながら、懸命についていこうとするのですが、いつか取り残され、星空を見上げるといふ日々が続きました。今も緑翠チームはト

レーナーが練習メニューを考え、それに従ってトレーニングを消化していくのですが、そのころのメニューはとてもビギナーについていける代物ではありませんでした。インターバルなどの強い練習が週に3回もある。今になって考えると、かなり無謀なメニューで、速く走れるようになるというより、根性をつけるためのトレーニングでしかないと思います。無理がたたってか、膝等に故障を持つ人が何人かいましたが、それでもだましまし走っていました。何が彼等を走らせるのか。それはすべて優勝という2文字のためでした。大会に向かう時など、かなり殺気立っていました。私がそう感じただけでも知れませんが。

3年の時、第25回大会('87年)で男子Aチームが悲願の初優勝。打ち上げも大荒れでした。この年の練習メニューは前の年に比べスロースタートで、緩く、ビギナーにも十分についていけるものでした。そして、その年の方針が「明るく、楽しい駅伝」。この流れは現在も続いているものです。私自身も走る事に幾分慣れ、楽しく走れました。オーバーワークにならない程度で早目に切り上げたことが、各自の体調を整えるのに最適だったと思います。また、楽しい中にも「お前には負けん」という競争心から、いたる所で火花が散っていました。良い意味での競争はお互いを高め合います。こういった緑翠の独特の雰囲気を作り上げた先輩方には今も頭の下がる思いです。

私が役員になった年から、西条に移ります。学部自体がそうだったように、何もないところからやっていく、例えばトラックがなかったのが現在ラグビー場になっている南グラウンドに石灰で白線をひき、400mトラックを作るところから始めなければいけません。照明設備もなく、日が経つにつれて練習時間も早くする必要もありました。現在は公認の400mトラックが完成し、今年になって照明設備も完成、練習するにはこの上ない条件が整っています。しかし、私自身、そういった設備やメニューの変化以上に、福山と西条での活動の違いに少々とまどっているのが本音です。

福山には先に書いたように本部から遠く、独自の活動を通して学部内の結束を強く感じました。2年生が後期から福山へやってくることを「帰福」と称しました。来るのではなく、帰って来るのです。「帰福」した2年生は早く「帰属」しようと授業、実験、サークル、コンパを通して先生方や先輩達とコンタクトをとります。無論、彼等もそれに応えます。毎年、初夏に行われていた学部祭では立派に帰属した新人が中心となり逆に学部を盛り立てます。私は緑翠チームもこういった学部の色が出た結果、または福山という特殊な環境の産物だと思うのです。西条に移り、帰福という言葉が消えたのと同時に福山にあっ

たいくつかの色が薄くなり、消えていったように思います。本部と近いのか、人が変わってしまったためか分かりませんが緑翠チームも新人を入れるのに今たいへん苦勞しています。決定的なことに、2年生が入らないのです。西条での3年間、チームに入った2年生は片手で数えられるほどです。福山で生活したことのある学生が、もう院生だけになってしまった現在、今は西条の色を出していく時だと思います。でもそれは果たして利己主義という色なのでしょうか。学部が大きく変わったように緑翠チームも変化していきます。しかし、どこかの団体ではありませんが、明るく、楽しく、激しい緑翠チームであり続けてほしいと思います。緑翠チームは卒業する時、参加賞の手拭いに全員が寄せ書きをしてくれます。私ももらいましたが、その中のある教官の言葉を信じたいと思います。「まだまだ僕ものびるし、緑翠ものびる」

今年(第28回)は男子Aチームが3位でゴールするも失格してしまいました。無念。春先からコンディションを整え、夏も急斜面の農場でひたすらトレーニングをし、自分達が言うところの「猿のように」走ってきた4年生達の事を思うと胸が詰まります。ある者は森戸を掛け抜け倒れ込むようにゴールに入ってきた。ある者は自分の責任を感じ涙を流した。でも私達の胸の中では3位だったのです。

